

地方都市の発展と生活環境の変化

中 島 直 子

論文構成

第1章 生活環境・地方都市論

- 1-1 生活環境
- 1-2 地方都市
- 1-3 本研究の目的と方法

第2章 地方都市—小田原—

- 2-1 小田原の都市史
- 2-2 小田原市の位置
- 2-3 都市—小田原—の範囲

第3章 小田原の生活環境

- 3-1 居住地域の拡大
- 3-2 自然的生活環境
 - 1 地形 2 植生
 - 3 都市の緑
- 3-3 人文的生活環境
 - 1 人口密度 2 年齢構成
 - 3 持家率
 - 4 自営業・小売卸売業就業率
 - 5 上下水道・都市ガス普及度
 - 6 地価
 - 7 貨物自動車・自転車率

第4章 生活環境の連続性と不連続性

- 4-1 生活環境の連続性
- 4-2 生活環境の不連続性

本研究の目的は

- 1). 地方都市の特質を生活環境の観点より把握できるか。
- 2). 地方都市の生活環境の相違を自然的・人文的要素の複合体として把握できるか。
- 3). “住み良さ”は その土地の過去の土地利用形態と 連続性をもつか。

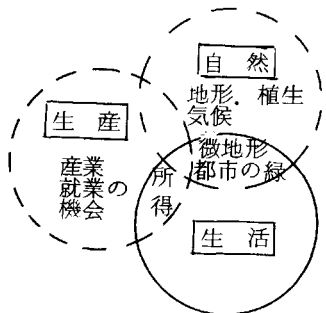
の疑問に対する解答を 事例研究地の小田原においての調査結果より導き出す事である。筆者が「地方都市」と限定するのは、何らかの *locality* を保持する地方都市こそ、都市の本質的のものである。

ったはずだし 又、全国の都市が等質化せず 個性を将来においても保持してほしいと願い、その第一歩として本研究に取り組むからである。

まず、筆者が生活環境をいかに捉えているかを述べ、次に2章以下の内容の要約を述べる事にする。

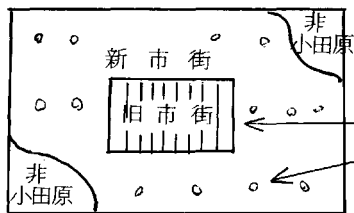
1-1 生活環境

生産環境・自然環境の一部を含む“住み良さ”の事であり、下水道・公園・学校整備といった、いわゆるハードな面のみならず、地域社会・文化などソフトな面まで包含する、地域の生活の環境と考える。(F-1)



すると 現在の都市は「過去から現在に到る生活環境の集積の産物」と言える。

行政区域の小田原市から 都市-小田原一を決定し、更に「近世に発達した市街」と「近代以降発展している市街」に二分した。前者は 商業機能と在来工業に長い歴史と特色をもつ旧市街、後者は、昭和20,30年代の工場誘致に起源する新市街である。



F-2

小田原の発達史的構造

旧市街も勿論、その後の近代化・都市化の影響を受けているが、両地区の発達史の相違による生活環境の一般的差異は存在している。(F-2)

2-1 都市史

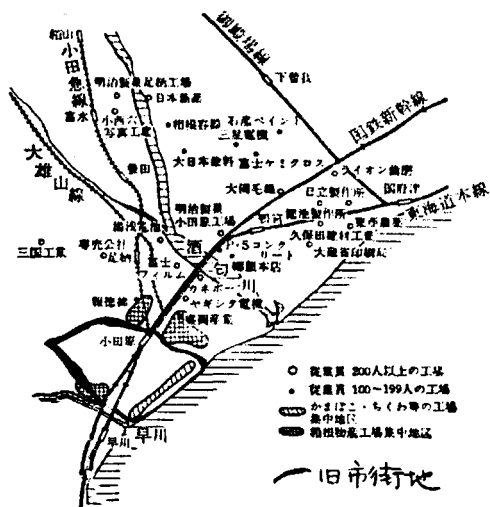
小田原の町としての発達の基礎は1495年北条早雲に始まり(城下町)、近世には これに宿場町の機能も加わった。明治維新から、1934(昭和9)年丹那トンネル開通による東海道線小田原経由までは、斜陽時代(保養地として文人・軍人・政財界人に利用された時期もあるが)であり、この東海道線小田原経由は、町の歴史上の一大交通革命と言えよう。そして 前述の如く戦中戦後の疎開工場・工場誘致により近代工業化され(F-3)、昭和37年頃には、商業年間販売額と製造品出荷額の比較によると、工業機能が商業機能を上回ったと言える。(T-1)

T-1 単位(100万円)

昭和(年)	商業年間販売額	製造品出荷額
26	5549	3680
36	33200*	32700
51	285526	363486

*は昭和37年

F-3 市内の主要工場の分布



2-2 小田原市の位置

小田原市の人口増は、自然増に基づく緩慢な増加(昭和50年6.0%)を示し社会増は近年マイナスである。小田原旧市街では、11年以上の居住者が90%を示し、土着性の傾向が強い。工場誘致に伴う激しい社会増はみられず市民の就業先の確保程度の工業化であった。また市内在住の勤労者の就業地先は市内75%、小田原も含む県西10市町村82%⁽¹⁾であり又県西に独自の商品販売圏⁽²⁾を持つなど、県西の中心都市と言えよう。

また全国644都市の一人当たり平均所得を100(昭和50年)とした時の小田原の所得格差は120である。これは東京区部140を中心に歪んだ同心円状に広がる所得格差等値線120(千葉-我孫子-松戸-和光-大宮-上福岡-狹山-東大和-八王子-相模原-秦野-南足柄-小田原)の最西端に位置する。よって小田原市は在来工業・地方中心商業機能・勤労者就業地に現われる地方的経済基盤、そして土着性を保持しつつも東京大都市圏からの直接・間接の強い波及効果を受けている。

(1) 小田原市・南足柄市・中井町・大井町・松田町・山北町・開成町・箱根町・真鶴町・湯ヶ原町のこと。

(2) 東は二宮付近で、平塚の商圈と、西は箱根で、三島又は御殿場の商圈と競合する。また、湯河原方面温泉場又は足柄上郡の農村地区の物資供給地である。

3-1

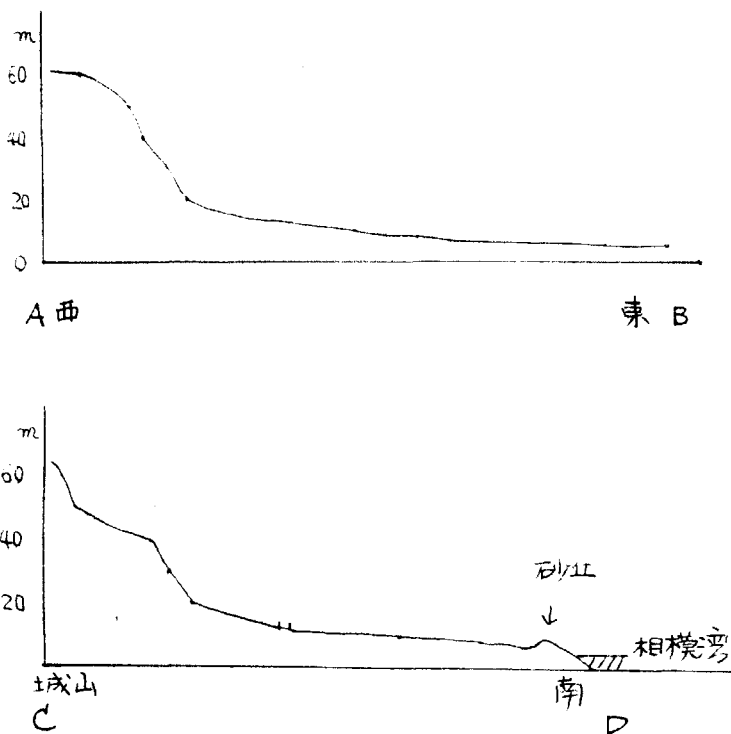
3章では新旧両市街の生活環境の相違を人文・自然の複数要素により比較した。

3-2-1 地形

旧町は西から張り出す箱根火山軽石流堆積物より成る山麓上にあり、東は山王川、南は相模湾に臨み、すっかり市街化が進んでいるが砂丘の発達もある。(F-4)

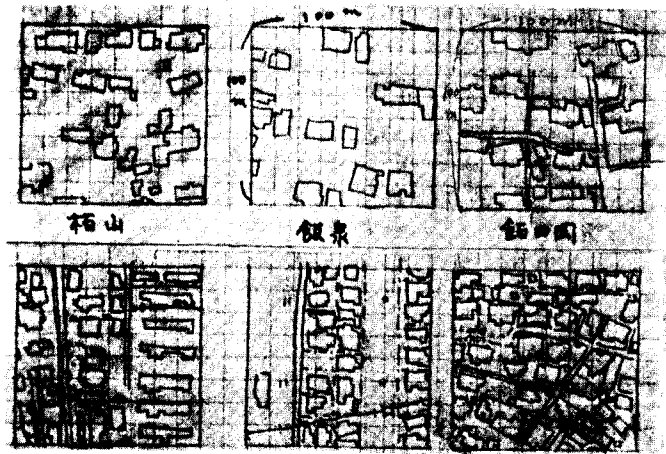
新市街は自然堤防・微隆起面(鴨宮面)。千代台などの微高地と後背低湿地より成る全体的には低平な扇状地性沖積平野上に南部から北部へと展開している。

微高地には 近世以来農村が散在していたがこれらの農村では、兼業化・生活様式都市化が進み、その後の新興住宅と比較すると微高地上下で著しい相違が見られる。



F - 4

微高地上は かつてのこの平野の植生に起因するとも思うが 遠望すると緑に包まれた住宅地の様相を呈し、水田地帯を宅地としている緑のない新興住宅地とは対象的である。また住居密度についても F-5 に示される如く顕著な差異がみられる。



F - 5

上段は微高地上のかつての農家，下段は新興住宅地で，アパート・社宅も多い。
 上 10～15戸/ha に対し，下 30～40戸/ha

3-2-3 都市の緑

新旧両市街の都市の緑（果樹園・田畑除く）を1：8000のカラー空中写真により判読した結果、旧市街に緑が多い傾向がわかった。

F-6 小田原の緑

	新市街	旧市街
宿城起 場下源 町町	東海道筋並木道のみで少ない	城山の緑・武家居住地の緑（200石以上） 土塁上の緑・寺町の緑 （町家地区には緑はみられない）
地よの 形り緑 性残 に存	微高地上の屋敷林 海浜林（マツ）	競技場周辺の斜面（スダジイ） 競輪場南斜面・小田原高校南斜面・小田原駅裏急崖部 板橋から南町に続く丘陵部（国道1号北側） 海浜林（マツ）
その他	社叢（神社は微高地上） 寺の緑	社叢 寺の緑（人口稠密なので寺も新市街より多かった）
ま と め	微高地上と海浜林を除くと樹木は非常に少ない。平野部がかつて低湿地でありその後、水田化され、更に宅地化されたため、未だ庭木も成長していないか、又は、宅地が狭小のため、その余裕がない。	旧市街が城下町であった故に存在する緑、丘陵・山麗に立地する故に残存した緑、居住年数の長さによる集積の結果、新市街より緑が多い。

3-3 人文的生活環境

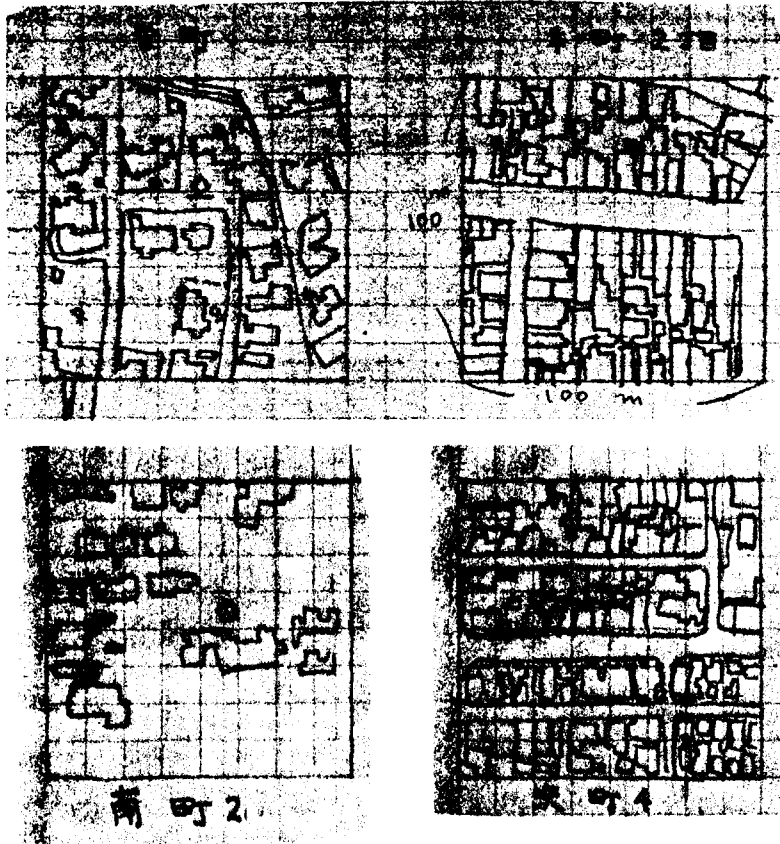
下表に両町の特色をまとめてみた。

T-2 人文的生活環境

	旧市街	新市街
起源	城下町 1490年代以降	水田→戦後の市街地
人口	25000～30000人	約 120000人
人口密度	100人/ha以上	100以下
人口増	停滞・減少 20世紀初めからはほぼ一定の人口保つ	増加 過去15年間に2～5倍に
都市サービス	優	F-6 劣
地価	6万/m ² 以上	F-8 4.5万/m ² 以下
敷地	かつての武家居住地区……大 かつての町家地区……小 F-7	一般に小 F-5
住民 年齢構成	中高年層 特に60歳以上の高齢者の 割合高い	10歳未満と25～40歳に極大 幼児率高い
就業	自営業者、小売・卸売業就業者多し (30～50%)・(31～57%)	製造業就業者多し(30～40%) 小売・卸売業就業者(5～20%)
産業	商業・地場産業(かまぼこ・木工他)	近代大工場 明治製菓・日本新薬・日立製作所・湯浅電 池・フジフィルム・ピーエスコンクリート 久保田鉄工 卸売市場・運送業
交通	大型貨物自動車の割合少ない。 F-9	貨物自動車・自転車率高い →危険性・交通不便性高い
社会 階層	かつての武家居住区が旧市街では住宅 地となっている。ここは高級住宅地の 様相を呈し、大商人や医師・弁護士・ 会計士など居住	工場労働者が多い。 (地方都市・小田原では、ホワイト・カラー 層が少なくその住宅街が欠如しているよう である。)

現在の都市一小田原は 生活環境の異質な旧市街・新市街の不連続体より形成される。新市街を「近代産業型地区」と呼べば 旧市街は「前産業型地区」と呼べるのではないか。

F-7 武家・町家地区の現在の住居密度



左が武家

右が町家

(縮尺1:2500)

正方形の1辺は100m

4-1 生活環境の連続性

旧町の武家居住区の現状を調査した結果、200石以上の地区は土地の細分化も顕著ではなく、都市施設も完備し買物にも便利、更に緑の多い高級住宅地化していることを把握した。地方都市の旧市街の住宅地は生活環境が優れている。

